

或る農学生の日誌

宮沢賢治

青空文庫

序

ぼくは農学校の三年生になったときから今日まで三年の間のぼくの日誌を公開する。どうせぼくは字も文章も下手だ。ぼくと同じように本気に仕事にかかった人でなかったらこんなもの実に厭な面白くもないものにちがいない。いまぼくが読み返してみてもさえ実に意気地なく野蛮なような気のするところがたくさんあるのだ。ちょうど小学校の読本の村のことを書いたところのようにじつにうそらしくてわざとらしくていやなところがあるのだ。けれどもぼくのはほんとうだから仕方ない。ぼくらは空想でならどんなことでもすることができ。けれどもほんとうの仕事はみんなこんなにじみなのだ。そしてその仕事をまじめにしているともう考えることも考えることもみんなじみな。そうだ、じみというよりはやぼな所謂田舎臭いものに変わってしまう。ぼくはひがんで云うのでない。けれどもぼくが父とふたりでいろいろな仕事のことを云いながらはたらいっているところを読んだら、ぼくを軽べつする人がきつと沢山あるだろう。そんなやつをぼくは叩きつけてやりたい。ぼくは人を軽べつするかそうでなければ

ば妬^{ねた}むことしかできないやつらはいちばん卑^{ひき}怯^{よう}なものだと思う。ぼくのように働^{はたら}いて
いる仲間^{なかま}よ、仲間よ、ぼくたちはこんな卑怯^{ひきよう}さを世界^{せかい}から無^なくしてしまおうでないか。

一九二五、四月一日 火曜日 晴

今日から新しい一学期^{がつき}だ。けれども学校へ行つても何だか張^{はり}合^あいがなかった。一年生
はまだはいらないし三年生は居^いない。居^いないのでないもうこつちが三年生なのだが、あ
の挨拶^{あいさつ}を待^まつてそつと横眼^{よこめ}で威張^{いば}つている卑怯^{ひきよう}な上級^{じょうきゅう}生^{せい}が居^いないのだ。そこ
で何だか今まで頭をぶつつけた低^{ひく}い天井^{てんじょう}裏^{うら}が無^なくなったような氣もするけれどもま
た支柱^{しちゆう}をみんな取^とつてしまった桜^{さくら}の木のような氣もする。今日の実習^{じっしゅう}にはそれを
やつた。去年^{きょねん}の九月古い競馬場^{けいばじょう}のまわりから掘^ほつて来て植^うえておいたのだ。今ごろ
支柱を取るのはまだ早いだろうとみんな思^{おも}つた。なぜならこれからちようど小さな根^ねが
でるころなのに西風はまだまだ吹^ふくから幹^{みき}がてこになってそれを切るのだ。けれども菊^{きく}
池先生^{くち}はみんな除^とらせた。花が咲^さくのに支柱があつては見^みつともないと云^いうのだけれど
も桜が咲くにはまだ一月もその余^よもある。菊池先生は春になつたのでただ面^{おも}白^{しろ}くてあ

れを取ったのだとおもう。

その古い縄なわだの冬の間のごみだの運動場うんどうじょうの隅すみへ集めて燃もやした。そこでほかの実習の組の人たちは羨うらやましがった。午前中その実習をして放課ほうかになった。教科書がまだ来ないので明日もやっぱり実習だという。午後はみんなでテニスコートを直なおしたりした。

四月二日 水曜日 晴

今日は三年生は地質ちしつと土性どせいの実習だった。斉藤さいとう先生が先に立って女学校の裏うらで洪積こうせき層そうと第三紀だいさんの泥岩でいがんの露出ろしゅつを見てそれからだんだん土性を調べながら小船渡こぶなとの北上きたかみの岸きしへ行った。河へ出ている広い泥岩の露出で奇体きたいなギザギザのあるくるみの化石かせきだの赤い高師小僧たかしこぞうだのたくさん拾った。それから川岸を下って朝日橋あさひばしを渡わたって砂利じやりになった広い河原へ出てみんなで鉄鎚かなづちでいろいろな岩石の標本ひょうほんを集めた。河原からはもうかげろうがゆらゆら立って向うの水などは何だか風のように見えた。河原で分れて二時頃ふごころうちへ帰った。そして晩ばんまで垣根かきねを結ゆって手伝てつだった。あしたはやすみだ。

四月三日　今日はいい付けられて一日古い桑の根掘りをしたので大へんつかれた。

四月四日、上田君と高橋君は今日も学校へ来なかった。上田君は師範学校の試験を受けたそうだけれどもまだ入ったかどうかはわからない。なぜ農学校を二年もやってから師範学校なんかへ行くのだろう。高橋君は家で稼いでいてあとは学校へは行かないと云ったそう。高橋君のところは去年の早魃がいちばんひどかったそうだから今年はずいぶん難儀するだろう。それへ較べたらうちなんかは半分でもいくらでも穫れたのだからいい方だ。今年は肥料だのすっかり僕が考えてきつと去年の埋め合せを付ける。実習は苗代掘りだった。去年の秋小さな盛りにしていた土を崩すだけだったから何でもなかった。教科書がたいてい来たそう。ただ測量と園芸が来ないとか云っていた。あしたは日曜だけれども無くならないうちに買いに行こう。僕は国語と修身は農事試験場へ行った工藤さんから譲られてあるから残りは九冊だけだ。

四月五日 日

南^{みな}万^{まん}丁^{ちやうめ}目^めへ屋^や根^ね換^かえの手^て伝^{つた}えにやられた。なかなかひどかった。屋根の上にのぼつていたら南の方に学校が長々と横^{よこ}わつて^{こた}ているように見えた。ぼくは何だか今日は一日あの学校の生徒^{せいと}でないような気がした。教科書は明日買う。

四月六日 月

今日は入学式^{しき}だった。ぼんやりとしてそれでいて何だか堅^{かた}苦^{くる}しそうにしている新入生はおかしなものだ。ところがいまにみんな暴^{あば}れ出す。来年になるとあれがみんな二年生になつていい気になる。さ来年はみんな僕^{ぼく}らのようになつてまた新入生をわらう。そう考えると何だか変^{へん}な気がする。伊^い藤^{とう}君^{くん}と行つて本屋^{ほんや}へ教科書を九冊^{さつ}だけとつておいてもらうように頼^{たの}んでおいた。

四月七日 火、朝父から金を貰^{もら}つて教科書を買った。

そして今日から授^{じゅぎよう}業だ。測^{そくりよう}量はたしかに面白^{おもしろ}い。地図を見るのも面白い。ぜ
んたいこちらの田や畑^{はたけ}でほんとうの反別^{たんべつ}になつてゐる処^{ところ}がないと武田^{たけだ}先生が云^いつた。
それだから仕事^{しごと}の予定^{よてい}も肥料^{ひりよう}の入れようも見当^{みあた}がつかないのだ。僕^{ぼく}はもう少し習^{なら}つた
らうちの田をみんな一枚^{まい}ずつ測^{はか}つて帳^{ちやうめん}面に綴^とじておく。そして肥料^{ひりよう}だのすつかり考
えてやる。きつと今年は去年^{きよねん}の旱魃^{かんぱつ}の埋^うめ合せと、それから僕^{ぼく}の授^{じゅぎよう}業料^{りやう}ぐら
いを穫^とつてみせる。実習^{じっしゅう}は今日も苗代^{なわしろほ}掘りだつた。

四月八日 水、今日は実^{じっしゅう}習^{しゅう}はなくて学校の行進歌^{こうしんか}の練^{れんしゅう}習^{しゅう}をした。僕^{ぼく}らが歌つて
一年生がまねをするのだ。けれどもぼくは何だか圧^おしつけられるようであの行進歌^{こうしんか}は
きらいだ。何だかあの歌を歌うと頭^{いた}が痛^{いた}くなるような気がする。実^{じっしゅう}習^{しゅう}のほう^{ほう}が却^{かえ}つ
ていいくらいだ。学校^{がっこう}から纏^{まと}めて注^{ちゅうもん}文^{ぶん}するといふので僕^{ぼく}は苹果^{りんご}を二本と葡萄^{ぶどう}を一本
頼^{たの}んでおいた。

四月九日〔以下空白〕

一千九百廿五年五月五日 晴

まだ朝の風は冷たいけれども学校へ上り口の公園の桜は咲いた。けれどもぼくは桜の花はあんまり好きでない。朝日にすかされたのを木の下から見ると何だか蛙の卵のような気がする。それにすぐ古くさい歌やなんか思い出すしまた歌など詠むのろのろしたような昔の人を考えるからどうもいやだ。そんなことがなかったら僕はもっと好きだったかも知れない。誰も桜が立派だなんて云わなかったら僕はきつと大声でそのきれいを叫んだかも知れない。僕は却ってたんぽぽの毛のほうを好きだ。夕陽になんか照らされたらいくら立派だか知れない。

今日の実習は陸稲播きで面白かった。みんなで二うねずつやるのだ。ぼくは杭を借りて来て定規をあてて播いた。種子が間隔を正しくまっすぐになった時はうれしかった。

た。いまに芽を出せばその通り青く見えるんだ。学校の田のなかにはきつとひばりの巢が三つ四つある。実習している間になんべんも降りたのだ。けれども飛びあがるところはつい見なかった。ひばりは降りるときはわざと巢からはなれて降りるから飛びあがるところを見なければ巢のありかはわからない。

一千九百二十五年五月六日

今日学校で武田先生から三年生の修学旅行のはなしがあった。今月の十八日の夜十時で発つて二十三日まで札幌から室蘭をまわって来るのだそうだ。先生は手に取るように向うの景色だの見て来ることだの話した。

つがるかいきよう
津軽海峡、トラピスト、函館、五稜郭、えぞ富士、白樺、小樽、札幌の大学、ビール、博物館、デンマーク人の農場、苦小牧、白老のアイヌ部落、室蘭、ああ僕は数えただけで胸が踊る。五時間目には菊池先生がうちへ宛てた手紙を渡して、またいろいろ話された。武田先生と菊池先生がついて行かれるのだそうだ。行く人が二十八人にならなければやめるそうだ。それは県の規則が全級の三分の一

以上参加いじょうさんかするようになってるからだそう。けれども学校へ十九円納おきめるのだしあと五円もかかるそうだから。きつと行けると思う人はと云ったら内藤ないとう君や四人だけ手をあげた。みんな町の人たちだ。うちではやってくれるだろうか。父が居いないので母へだけ話したけれども母は心配しんぱいそうに眼めをあげただけで何とも云わなかった。けれどもきつと父はやってくれるだろう。そしたら僕は大きな手帳てちょうへ二冊さつも書いて来て見せよう。

五月七日

今朝父へ学校からの手紙を渡してそれからいろいろ先生の云ったことを話そうとした。すると父は手紙を読んでしまつてあととはなぜか大へんあたりに気兼ねきがしたようすで僕が半分しか云わないうちに止めてしまった。そしてよく相談そうだんするからと云った。祖母そぼや母に気兼ねをしているのかもしれない。

五月八日 行く人が大ぶあるようだ。けれどもうちでは誰だれも何とも云わない。だから僕ぼくは

ずいぶんつらい。

五月九日、

三時間目に菊池^{きくち}先生がまたいろいろ話された。行くときまった人はみんな面白^{おもしろ}そうにして聞いていた。僕は頭^{あつ}が熱^{あつ}くて痛^{いた}くなった。ああ北海道、雑^{ざつ}囊^{のう}を下^さげてマントをぐるぐる捲^まいて肩^{かた}にかけて津^つ軽^{がる}海^{かい}峡^{きよう}をみんなと船^{ふね}で渡^{わた}ったらどんなに嬉^{うれ}しいだろう。

五月十日 今日もだめだ。

五月十一日 日曜^{くもり}曇^曇 午前^{ごぜん}は母^{はは}や祖母^{そぼ}といっしょに田^た打^{うち}をした。午後^{ごご}はうちのひば垣^{がき}をはさんだ。何^{なん}だか修^{しゅう}学^{がく}旅^{りょ}行^{こう}の話^{わたり}が^が出^でてから家^{いえ}中^{ちゆう}へんになつてしまつた。僕はもう行^いかなくてもいい。行^いかなくてもいいから学^{がく}校^{こう}ではあと授^{じゅ}業^{ぎよう}の時間^{じかん}に行^いく人^{ひと}を調^{しら}べ

たり旅行の話をしたりしなければいいのだ。

北海道なんか何だ。ぼくは今に働いて自分はたらで金をもうけてどこへでも行くんだ。ブラジルへでも行ってみせる。

五月十二日、今日また人数を調べた。二十八人に四人足りなかった。みんなは僕ぼくだの齊さい藤君うぐんだの行かないので旅行が不成立ふせいりつになると云いつてしきりに責せめた。武田先生たけだまで何だか変へんな顔をして僕に行けと云う。僕はほんとうにつらい。明后日みょうごにちまでにすっかり決きまるのだ。夕方父が帰かえつて炉ろばたに居いたからぼくは思い切きつて父にもう一度ど学校の事じ情じやうを云いつた。

すると父が母もまだ伊勢詣いせまいりさえしないのだし祖母そぼだつて伊勢詣り一ぺんところらの観か音巡り一ぺんしただけこの十何年死しぬまでに善光寺ぜんこうじへお詣りしたいとそればかり云いつてゐるのだ、ことに去年きよねんからのこころ全体ぜんたいの早かん魅ぼつでいま外あそへ遊あそんで歩くなんてことはとなりやみんなへ悪わるくてどうもいけないということことを云いつた。

僕はいくら下を向むいていても炉ろのなかへ涙なみだがこぼれて仕方しかたなかった。それでもしばらく

たつてからそんなら僕はもう行かなくてもいいからと云った。ぼくはみんなが修学旅行よこうへ発つ間休みだといつて学校は欠席けっせきしようと思つたのだ。すると父がまたしばらくだまつていたがとにかくもいちど相談そうだんするからと云つてあとはいろいろ稲いねの種類しゆるのことだのふだんきかないようなことまでぼくにきいた。ぼくはけれども氣持きもちがさっぱりした。

五月十三日 今日学校から歸つて田に行つてみたら母だけ一人居いて何だか嬉うれしそうにして田の畦あぜを切つていた。

何かあつたのかと思つてきいたら、今にお父さんから聞けといった。ぼくはきつと修学旅行ぼくのことだと思つた。

僕ぼくもそこで母が家へ歸るまで田打ちたうちをして助たすけた。

けれども父はまだ歸つて来ない。

五月十四日、昨夜父が晩く帰つて来て、僕を修学旅行にやると云った。母も嬉しそうだつたし祖母もいろいろ向うのことを聞いたことを云った。祖母の云うのはみんな北海道開拓当時のことらしくて熊だのアイヌだの南瓜の飯や玉蜀黍の団子やいまとはよほどちがうだろうと思われた。今日学校へ行つて武田先生へ行くと云つて届けたら先生も大へんよろこんだ。もうあと二人足りないけれども定員を超えたことにして県へは申請書を出したそうだ。ぼくはもう行つてきつとすっかり見て来る、そしてみんなへ詳しく話すのだ。

一九二五、五、一八、

汽車は闇のなかをどんどん北へ走つて行く。盛岡の上のそらがまだぼうつと明るく濁つて見える。黒い藪だの松林だのぐんぐん窓を通つて行く。北上山地の上のへりが時々かすかに見える。

さあいよいよぼくも岩手県をはなれるのだ。

うちではみんなもう寝ただろう。祖母さんはぼくにお守りを借してくれた。さよなら、

北上山地、北上川、岩手県の夜の風、今武田先生が廻^{まわ}つてみんなの席^{せき}の工合^{ぐあい}や何かを見て行^いつた。

一九二六、五、一九、〔以下空白〕

五月十九日

*

いま汽車は青森県の海岸^{かいがん}を走っている。海は針^{はり}をたくさん並^{なら}べたように光っているし木のいつぱい生^はえた三角な島もある。いま見ているこの白い海が太平洋^{たいへいよう}なのだ。その向^{むこ}うにアメリカがほんとうにあるのだ。ぼくは何だか変^{へん}な気がする。海^{みさき}が岬^{みさき}で見えなくなつた。松^{まつ}林^{はやし}だ。また見える。次^{つぎ}は浅^{あさ}虫^{むし}だ。石^{いし}を載^のせた屋根^{やね}も

見える。何て愉快ゆかいだろう。

＊

青森の町は盛岡もりおかぐらいたった。停車場ていしやじようの前にはバナナだの苹果りんごだの売る人がたくさんいた。待合室まちあいしつは大きくてたくさんの人が顔を洗あらったり物を食ものべたりしている。待合室で白い服ふくを着きた車掌しやしやうみたいな人が蕎麦そばも売っているのはおかしい。

＊

船はいま黒い煙けむりを青森の方へ長くひいて下北半島しもきたはんとうと津軽半島つがるの間を通って海かい峡きやうへ出るところだ。みんなは校歌をうたっている。けむりの影かげは波なみにうつって黒い鏡かがみのようだ。津軽半島の方はまるで学校にある広重ひろしげの絵のようだ。山の谷がみんな海まで来ているのだ。そして海岸かいがんにわずかの砂浜すなはまがあつてそこには巨おおきな黒松くろまつの並木なみきのあつた街道かいどうが通っている。少し大きな谷には小さな家が二、三十も建たつていてその浜に

は五、六その舟もある。

さつきから見えていた白い燈台はすぐそこだ。ぼくは船が横を通る間にだまってすっかり見てやろう。絵が上手だといいいんだけれども僕は絵は描けないから覚えて行つてみんな話すのだ。風は寒いけれどもいい天気だ。僕は少しも船に酔わない。ほかに誰も酔つたものはない。

*

いるかの群が船の横を通っている。いちばんはじめに見附けたのは僕だ。ちよつと向うを見たら何か黒いものが波から抜け出て小さな弧を描いてまた波へはいつたのでどうしたのかと思つてみていたらまたすぐ近くにも出た。それからあつちにもこつちにも出た。そこでぼくはみんなに知らせた。何だか手を氣を付けの姿勢で水を出たり入ったりしているようで滑稽だ。

先生も何だかわからなかったようだが漁師の頭らしい洋服を着た肥った人があいるかですと云つた。あんまりみんな甲板のこつち側へばかり来たものだから少し船が

傾かたむいた。

風が出てきた。

何だか波が高くなってきた。

東も西も海だ。向うにもう北海道が見える。何だか工合ぐあいがわるくなってきた。

＊

いま汽車は函館はこだてを発たつて小樽おたるへ向むつて走っている。窓まどの外はまっくらだ。もう十一時だ。函館の公園はたつたいま見て来たばかりだけれどもまるで夢ゆめのようだ。

巨おおきな桜さくらへみんな百ぐらいずつの電燈でんとうがついていた。それに赤や青の灯ひや池にはかきつばたの形した電燈でんとうの仕掛しかけものそれに港みなとの船の灯や電車の火花じつにうつくしかつた。けれどもぼくは昨夜さくやからよく寝ねないのでつかれた。書かないでおいたってあんなうつくしい景色けしきは忘れわすれない。それからひるは過燐酸かりんさんの工場と五稜郭ごりようかく。過燐酸かりんさん石灰せっかい、硫酸りゅうさんもつくる。

五月廿日

*

いま窓の右手にえぞ富士が見える。火山だ。頭が平たい。焼いた枕木でこさえた小さな家がある。熊笹が茂っている。植民地だ。

*

いま小樽の公園に居る。高等商業の標本室も見てきた。馬鈴薯からできるもの百五、六十種の標本が面白かった。この公園も丘になっている。白樺がたくさんある。まつ青な小樽湾が一目だ。軍艦が入っている。海軍には旗も立っている。時間があれば見せるのだがと武田先生が云った。ベンチへ座ってやすんでいると赤い蟹をゆでたのを売りに来る。何だか怖いよう

だ。よくあんなの食べるものだ。

*

一千九百廿五年十月十六日

一時間目の修身しゅうしんの講義こうぎが済すんでもまだ時間が余あまっていたら校長が何でも質問しつもんしていいと云った。けれども誰も黙だまつていて下を向むいているばかりだった。ききたいことは僕ぼくだつてみんなだつて沢山たくさんあるのだ。けれどもぼくらがほんとうにききたいことをきくと先生はきつと顔をおかしくするからだめなのだ。

なぜ修身がほんとうにわれわれのしなければならぬと信しんずることを教えるものなら、どんな質問でも出さしてはつきりそれをほんとうかうそか示しめさないのだろう。

一千九百廿五年十月廿五日

今日は土性調査の実習だった。僕は第二班の班長で図板をもった。あとは五人でハムマアだの検土杖だの試験紙だの塩化加里の瓶だの持つて学校を出るときの愉快さは何とも云われなかった。谷先生もほんとうに愉快そうだった。六班がみんな思い思いの計画で別々のコースをとつて調査にかかった。僕は郡で調べたのをちゃんと写して予察図にして持つていたからほかの班のようにまごつかなかった。けれどもなかなかわからない。郡のも十万分一だしほんの大体しか調べつていない。猿ヶ石川の南の平地に十時半ころまでにできた。それから洪積層が旧天王の安山集塊岩の丘つづきのにも被さつていゝるかがいちばんの疑問だったけれどもぼくたちは集塊岩のいくつも露頭を丘の頂部近くで見附けた。結局洪積紀は地形図の百四十米の線以下という大体の見当も附けてあとは先生が云つたように木の育ち工合や何かを参照して決めた。ぼくは土性の調査よりも地質の方が面白い。土性の方ならただ土をしらべてその場所を地図の上にその色で取つていくだけなのだが地質の方は考えなければいけないしその考えがなかなかうまくあたるのだから。

ぼくらは松林の中だの萱の中で何べんもほかの班に出会つた。みんなぼくらの地図

をのぞきたがつた。

萱の中からは何べんも雉子も飛んだ。

耕地整理になつているところがやつぱり旱害で稲は殆んど仕付からなかつたらしく赤

いみじかい雑草が生えておまけに一ぱいにひびわれていた。

やつと仕付かつた所も少しも分蘖せず赤くなつて実のはいらぬ稲がそのまま刈りと

られずに立つていた。耕地整理の先に立つた人はみんなの爲にしたのだそうだけれども

ほんとうにひどいだろう。ぼくらはその土性もすっかりしらべた。水さえ来るならき

つと将来は反当三石まではとれるようにできると思う。

午後一時に約束の通り各班が猿ヶ石川の岸にあるきれいな安山集塊岩の露

出のところに集つた。どこからか小梨を貰つたと言つて先生はみんなに分けた。ぼく

たちはそこで地図を塗りなおしたりした。先生はその場所では誰のもいいとも悪いとも

云わなかつた。しばらくやすんでから、こんどはみんな先生について川の北の花崗

岩だの三紀の泥岩だのまではいった込んだ地質や土性のところを教わつてあるいた。

図は次の月曜までに清書して出すことにした。

ぼくはあの図を出して先生に直なおしてもらった。次の日曜に高橋たかはし君を頼たのんで僕のうちの近所きんじよのをすっかりこしらえてしまうんだ。僕のうちの近こくなら洪積こうせきと冲積ちゅうせきがあるきりだしずっと簡単かんたんだ。それでも肥料ひりょうの入れようやなんかまるでちがうんだから。いまならみんなはまるで反対はんたいにやつてゐるんじゃないかと思う。

一九二五、十一月十日。

今日実習じっしゅうが済すんでから農舎のうしやの前に立つてグラジオラスの球根きゅうこんの早ほしてあるのを見ていたら武田先生たけだも鶏小屋にわとりこやの消毒しょうどくだか済すんで硫黄華いおうかをずぼんへいっぱいつけて来られた。そしてやつぱり球根を見ていられたがそこから大きなのを三つばかり取とって僕に呉くれた。僕がもじもじしているとこれは新らしい高価たかい種類しゅるいだよ。君にだけやるから来春植うえてみたまえと云った。すると農場の方から花の係かかりの内藤先生ないとうが来たら武田先生は大へんあわててポケットへしまっておきたまえ、と云った。ぼくは変へんな気がしたけれども仕方しかたなくポケットへ入れた。すると武田先生は急いそいで農舎の中へはいって農具のうぐだか何だか整理せいりし出した。ぼくはいやで仕方なかったので内藤先生が行ってから

そつと球根をむしろの中へ返して、急いで校舎へ入つて実習服を着換えてうちに歸つた。

一千九百二十六年三月廿「一字分空白」日、

塩水撰をやつた。うちのが済んでから櫓戸のもやつた。

本にある通りの比重でやつたら亀の尾は半分も残らなかつた。去年の旱害はいち

ばんよかつた所でもこんな工合だつたのだ。けれども陸羽一三二号のほうは三割ぐらい

しか浮く分がなかつた。それでも塩水選をかけたので恰度六斗あつたから本田の一町

一反分には充分だろう。とにかく僕は今日半日で大丈夫五十円の仕事はした訳だ。

なぜならいままでは塩水選をしないでやつと反当二石そこそこしかとつていなかっ

たのを今度はあちこちの農事試験場の発表表のように一割の二斗ずつの増収と

しても一町一反では二石二斗になるのだ。みんなにもほんとうにいいということが判る

ようになつたら、ぼくは同じ塩水で長根ぜんたいのをやるようにしよう。一軒のう

ちで三十円ずつ得してもこの部落全体では四百五十円になる。それが五、六人ただ半

日の仕事なのだ。塩水選をする間は父はそこの冬の間のごみを集めて焼いた。粃がで

きると父は細^{ほそ}長^{なが}くきれいに藁^{わら}を通して編^あんだ俵^{たわら}につめて中へつめた。あれは合理的^{ごうりてき}だと思う。湧^{わき}水^{みず}がないので、あのつつみへ漬^つけた。氷^{こおり}がまだどての陰^{かげ}には浮^ういているからちようと摂^{せつ}氏^し零^{れい}度^どぐらいだろう。十二月にどてのひびを埋^うめてから水は六分目までたまっていた。今年こそきつといいのだ。あんなひどい旱^{かん}魃^{ばつ}が二年続^{つづ}いたことさえいままでの気^き象^{しやう}の統計^{とうけい}にはなかったというくらいなもの、どんな偶^{ぐう}然^{ぜん}が集^{あつ}まったって今年まで続^{つづ}くなんてことはないはずだ。気^き候^{こう}さえあたり前^{まへ}だったら今年には僕はきつといままでの旱^{かん}魃^{ばつ}の損^{そん}害^{がい}を恢^{かい}復^{ふく}してみせる。そして来^{らい}年^{ねん}からはもううちの経^{けい}済^{さい}も樂^{らく}にするし長根^{ながね}ぜんたいまできつと生^{いき}々^{いき}した愉^ゆ快^{かい}なものにしてみせる。

一千九百二十六年六月十四日 今日はやつと正^{しょう}午^ごから七時まで番^{ばん}水^{すい}があたったので樋^と番^{いばん}をした。何^{なん}せ去^き年^{ねん}からの巨^{おお}きなひびもあるとみえて水はなかなかたまらなかった。くろへ腰^{こしか}掛^かけてこぼこぼはつていく温^{あた}い水^{たか}へ足を入れていてついとろつとしたらなんだかぼくが稻^{いね}になつたような気がした。そしてぼくが桃^{もも}いろをした熱^{ねつ}病^{びょう}にかかつていてそこへいま水が来たのでぼくは足から水を吸^すいあげているのだった。どきつとして眼^め

をさました。水がこぼこぼ裂目^{さけめ}のところ^{あわ}で泡を吹きながらインクのようにゆっくりゆつくりひろがっていったのだ。

水が来なくなつて下田^{しらかき}の代掻^{しろかき}ができなくなつてから今日^{けふ}で恰度^{ちやうど}十二日雨^ふが降らない。いったいそらがどう変^{かわ}つたのだらう。あんな旱魃^{かんばつ}の二年続^{つづ}いた記録^{きろく}が無いと測候所^{そくこうじょ}が云^いつたのにこれで三年続くわけでないか。大堰^{おおぜき}の水もまるで四寸^{すん}ぐらいしかない。夕方になつてやつといままでの分^{ぶん}へ一わたり水がかかった。

三時ごろ水がさつぱり来なくなつたからどうしたのかと思つて大堰^{おほい}の下^{した}の岐^{まが}れまで行つてみたら権十^{ごんじゅう}がこつちをとめてじぶんの方^{むかひ}へ向^むけていた。ぼくはまるで権十^{ごんじゅう}が甘^{かん}藍^{らん}の夜盗虫^{よとうむし}みたいな氣^きがした。顔^{かほ}がむくむく膨^{ふく}れていて、おまけにあんな冠^{かぶ}らなくともいいような穴^{あな}のあい^あいたつばの下^{した}つた土方^{どかた}しやつぽをかぶつてその上^{うへ}からまた頬^ほかぶりをしているのだ。

手も足も膨^ふれているからぼくはまるで権十^{ごんじゅう}が夜盗虫^{よとうむし}みたいな氣^きがした。何^{なに}をするんだと云^いつたら、なんだ、農学校^{のうがく}終^{おわ}つたつて自分^{おのれ}だけいいことをするなと云^いうのだ。ぼくもむつとした。何^{なに}だ、農学校^{のうがく}なぞ終^{おわ}つても終^{おわ}らなくてもいまはぼくのとこの番^{ばん}にあたつて水を引^ひいているのだ。それを盗^{ぬす}んで行くとは何^{なに}だ。と云^いつたら、学校^{がく}へ入^いつたんでしやべ

れるようになったもんな、と云う。ぼくはもう大きな石をたたきつけてやろうとさえ思
った。

けれども権十はそのまま行ってしまったから、ぼくは水をうちの方へ向け直した。やつ
ぱり権十はぼくを子供だと思つてぼくだけ居たものだからあんなことをしたのだ。いま
にみる、ぼくは卑怯なやつらはみんな片っぱしから叩きつけてやるから。

一千九百二十七年八月廿一日

稲がとうとう倒れてしまった。ぼくはもうどうしていいかわからない。あれぐらい昨日
までしつかりしていたのに、明方の烈しい雷雨からさつきまでにほとんど半分倒れて
しまった。喜作のもこっそり行つてみたけれどもやつぱり倒れた。いまでもまだ降つてい
る。父はわらつて大丈夫大丈夫だと云うけれどもそれはぼくをなだめるためでじつは
大へんひどいのだ。母はまるでぼくのことばかり心配している。ぼくはうちの稲が倒
れただけなら何でもないのだ。ぼくが肥料を教えた喜作のだってそれだけなら何でも
ない。それだけならぼくは冬に鉄道へ出ても行商してもきつと取り返しをつける。

けれども、あれぐらい手入をしてあれぐらい肥料を考えてやってそれでこんなになるのならもう村はどこもつとよくなる見込みこみはないのだ。ぼくはどこへも相談そうだんに行くところがない。学校へ行つたつてだめだ。……先生はああ倒れたのか、苗なえが弱くはなかったかな、あんまり力を落おとしてはいけないよ、ぐらいのことを云つて笑わらうだけのもんだ。日誌にっし、日誌、ぼくはこの書きつける日誌がなかったら今夜どうしているだろう。せきはとめたし落し口は切つたし田のなかへはまだ入られないしどうすることもできずだまつてあのぼしよぼしよしたりまたおどすように強くなったりする雨の音を聞いていなければならぬのだ。いったいこの雨があしたのうちに晴れるだなんてことがあるだろうか。ああどうでもいい、なるようになるんだ。あした雨が晴れるか晴れないかよりも、今夜ぼくが………を一足つくれることのほうがよっぽどたしかなんだから。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

※底本は、一つ目の「猿ヶ石」の「ケ」（区点番号586）は大振りに、二つ目の「猿ヶ石」のそれは、小振りにつくっています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或る農学生の日誌

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>